頌詩

室住一妙

一

①
こゝには一つ、偶然の事実がある
むかしことばの「からてんじく」
地球の屋根の棟高く
亜熱帯の大陸原

②
ゴツ〳〵の岩肌に生い立って
半年に一度甘雨を飲んで
昼の灼熱と夜の酷寒と
年がら年中の風塵と猛獣と
まったくの一年の斗い
不断の営みが、つゞきました

③
目にもみえない、想像も及ばない、御守護の力に守られて
億々分の一という偶然の目こぼしに恵まれて
絶対絶命
黄色な一輪が結晶いたしました

④
つゝしんで
ひそかに
――（あゝ、誰とかいう人間には、みとめられないにしても）――
はるかな　天空の
大日天さまへ
大月天さまへ
さゝげられます
シャボテンの花

⑤
シャボテンの花
それを　みつめると

まったく　すばらしいとおもう
——背後には、生命にかゝわる全一宇宙

⑥
人間
自分自身
それを　かれと　比較してみる
とても　とても
はづかしいと　おもう！
どうしてだろうか？

⑦
われわれには
純な　依法不依人　がないのではあるまいか
かけひきなしの常精進がないようだ
くもり　にごり　まよい　うらみ
そうして　どこかへ　流動していく微生物にちがいない
そういう我々人類ではないか

⑧
依法不依人
まことに　よいひゞきです
たしかに　天地を
浄化する音声(こえ)です

⑨
科学は　それによって伸びるし
文化は　それによって栄えるし
人類は　それによって進化する
無限大に　向上して神にまで、仏にまで進化するということです。

⑩
それは　人類すべてが　仏に成るという宣言です
そういう希望があって　すでに実証があるのでした
仏より出でて　仏にかえる　法輪転
そういう　法への依法です
おお　地球には　シンボルとして　高くはためいております。

⑪
「夫れ　一切衆生の　尊敬すべきもの　三あり　所謂主・師・親これなり。」
主と師と親との三つ　そのものを統一している意味は
唯だ一つ
根元の法がそれであります

⑫
「また　習学すべきもの　三あり　所謂　儒・外・内これなり。」
全世界教学鑽仰の唱導
かの　根元法への帰依のためです

二

⑬
もしも　人類史というものが　本当の光輝を放つ時

（世紀）が来るというなら
ギジハ！クッタ（グルジャーラ・クッタ）とか　いう
丘峯の名が、
世界全人類の耳朶をうち、心胸をときめかす時からでしょう。

⑭
その理由は
シャカムニ・ブッドハ、（訳して、シャカ族出身の聖者・大自覚者）（AD五六六～四八六）この人の伝道五十年の晩年
「その生命の結晶と肝心」の讃歌が、この山丘だったそうです
さらに　その山上　はるかな〳〵
大虚空の中だったそうです

⑮
この人は　至極　恵まれた王者の宮廷に生い立ったが
物心のついてから　敏感に　早くも　生き物一般の哀さを　正当に体感した　正思惟した
そうして年々歳々　生長していく間、社会国家のいろんな事件も　さることながら、遂には人類　普遍に課されている　運命と対決しようとした
依法不依人のためでした。

⑯
そこで　財宝も享楽も棄てた
伝統も権力も捨てた
名誉も恩義も愛執も国民大衆もすべて、いさぎよくすてた
まったく　大なる捨を果した
そういう一個人は　単なる個人ではない
その一個の人には民族も人類も世界をも籠められている
歴史も文化も存在も超えている人である
いわば　人生を超えた生活を正命といゝ逞しい努力を正精進といゝ、以て自意識を正したのを正念といゝ
そして一点に集中するのを正定という
こうした積み重ねと修習は　幾年間

⑰
生き物の世界（欲界）を歩いた
神の世界というところ（色界）も翔けた
魂の世界（無色界）にも透った
対すべきは　すべて対当
決すべきは　敢えて対決
ついに降魔し　成道した
依法不依人の行者は達した
無上の大士として　正覚した
かくて真実に如来したまう

⑱

完全な明行足をふみたまう
かゞやく　正遍知世尊
こゝろよい世間解世尊
一鉢をさゝげて　乞食群の中
つゝましく生きるための衣食住
悪罵汚辱離反叛逆殺傷……九横の大難は五十年
天人の師として　すこやかに
大丈夫として調御自在にふるまい
無上の法を説いて　説いて説き尽し
悠々として　穏ろしく逝きたまう
導きめぐって　山河　幽林のうち
八十の老比丘　病める五体
徐かに横たえ　枕は北に
その刻　なを
最期の護念のお言葉
侍べる数人の弟子を通して
永遠の将来を祝禱したまう
「諸行は無常なり　涅槃こそ寂なり静なり　皆々　放逸なるなかれ　常に精進せよ」
承けて自らに銘ず
「自灯　法灯　自帰　法帰」

⑲

また釈して、
「人四依　法四依　依法不依人」

三

⑳

思えば　釈迦仏御一代の御説法は　長かった　しかし
世尊法久後　要当説真実
その真実　といわれる内容は
諸仏世尊　唯以一大事因縁故　出現於世　欲令衆生
開仏知見　使得清浄故　出現於世乃至云々。
つまりは、
如我昔所願　今者已満足　化一切衆生　皆令入仏道
ゆえに　この経を要として　仏法全体がよみがえるのですが、
もっと重大なことは　虚空会
ギリジャーラ・クッタの空高く
宝塔涌現
仏舎利塔が開かれ　二仏並坐したまうて大宣告がある
末法の衆生成仏の大事業のことである
そのため
大地より召喚された大菩薩たちは
釈尊の本地・本体の御開顕ののちに特別の御付嘱とな

㉑

り

この世界を　宇宙を　そっくり常寂光土とする　大事業のためおつかわしになりました。

㉒ 末法とは法滅・無救という通仏教の定義
つかわされた人が附け加えて
「謗法堕獄」

㉓ 時刻をいえば、たしかに現代及び将来
こゝ　数年来　お互いが　きゝならわし　いゝならわしてきた誇らしいことば「宇宙時代」とは、実は「アビ叫喚」の替え語なのではなかろうか。

㉔ まことに現代は、都市化は進み　従って沙漠化していく　万事ドライ化するが血なまぐさい
交通地獄は拡大し
どよもす公害
マスコミの洪水と空襲
深山幽谷森林ジャングルも忽ち荒涼
国会と街頭の叫喚
犯罪の凶悪
――それらを又々全国放送、朝夕幾度
戦争はもとより昼夜、すでに幾年
両陣　死力国力を挙げて過熱はせまる
二十三年前、空高く生えたキノコ雲二つ、今はそれに幾百倍する大物、千とか萬とか競うて製造し貯えて、そうして一触即発を待っている

㉕ 即発の暁は
明る過ぎる　暑つすぎる
地球太陽の出現

㉖ 人間なんかどこの穴倉にひそめるか　どうか？
日本人間には　ヒナン　ソカイ　とかいうことばは出ない。行く先きもない　方法もない
たしからしいことは「地球に一蓮托生した三十億の人類が、茲はアビ獄だと気がつく」こと
そういう運命共同体

㉗ 久米仙の山も浦島が竜宮も、とっくにない　かぐやひめの宮殿さえも毒気や怪雲につゝまれる
その時まで　百世紀前、太古の悪夢の断片など（怪獣・ロボット）漫画にみて喜んでいる
こんな愚劣な現代人が我々である
この不安恐怖の暗闇の中に夢みているもの　眠りこけているもの　をびえつゝかすかにすがってるもの、出ようともしないもの、出るにも出られないのだが

㉘ この　全くのがれようもない恐しい極限空間を地獄と

いうらしい。その時間を無間（アビ）というらしい。
釈尊は　この時間を感じとって、そのどん底に　救い
の綱を一本（糸より細いが地球も太陽系も珠数つなぎ
にできる）
依法不依人という合図で下げたまうた

四

㉙
本宗の宗義は
われ〳〵の　いのちが
久遠本仏に直結した　大きな綱
それは　日蓮大聖人によって現実化した
それは　これから将来永遠にわたって
全人類を救済してやまぬ　大秘法である

㉚
今身より　仏身に至るまで
能く　持ちたてまつる
南無妙法蓮華経
――そういう大綱である。

㉛
五字七字
南無は法に対する人の心の態度決定
五字は法の極要
帰依は三帰・四依

㉜
四依に人と法とあり
譬えば――
無底の深谷に墜ちた
まわりは絶壁
上る手段足段全くとない
そのとき　上に声あり　大綱下る
「綱をとれ！離すな！
　三疑を断って持続せば
　必ず救い挙げられるぞ」

㉝
三疑とは　仏力・法力・信力への疑惑
岸上大地とは　我此土安穏の常寂光土
今身の谷底とは　末法の現実（法滅・無救・堕獄）の
我等、穴中暗中夢中の生活者　しかも危機必迫の極限
状況
依法の持ち方、能が字眼

五

㉞
依法　良き教権
不依人　善き覚悟
われら　まる〳〵の凡夫そのまゝ　ぶっつけていこう
賢明さより正常さ　正常さより誠実さ

その誠実をどこまでも貫き到り、全宇宙中核に達する
その確信と心情と態度と努力とによってのみ　教権は
保証される
確信なくば盲従　心情なくば卑屈　態度なくば律法
教権こそ生命をかける対象

㉟
対決は食うか食われるかの果し合い
白刃をとって斬り相う真剣勝負
そこに何かを　かけている
「つまらない人生、はかない生命」とも　いゝ得まい
が　普通の歩道を行こうにも車でいこうにも　真剣な
果し合いである
ゆえに　みな〳〵保険の強請
そんなら　一そのこと　宗教にかけるか

㊱
宗教　レリジョン
神と人との約束とか　旧約、新約等々
次第に時国に応じて結ばれ解かれ棄てられ又結ばれる
転々として
そこで世界宗教史が編集されてくる

㊲
その約束とは　かける　ことらしい
生命を賭け　生活を掛け　ともかく
一生一期の人をもって　法と乗け合わす
その積は果して何者に化けるやら
すばらしい法には　生々世々懸けて　悔いないはづで
ある。